

アンソロジー・フィルム・アーカイヴス

—ジョナス・メカスの映画保存所

岡田 秀則

Hidenori Okada

連載：
フィルム・アーカイブ
の諸問題
第58回

これまで世界の様々なフィルム・アーカイヴを紹介してきた本連載だが、今回は映画作家ジョナス・メカスが設立したことで知られるニューヨークのアンソロジー・フィルム・アーカイヴスを取り上げる。

私にとってものをつくること—芸術作品、映画あるいは絵画または音楽と呼ぶこともできそうですが—、それをほかの人と分かち合うことのあいだには何の違いもありません。そして分かち合うためにはそれを保存しなければならない—それ以外にどうしてほかの人と共有できるでしょうか。

だから私は映画をつくり、そしてほかの人によってつくられた映画やその他の芸術作品を観ます。そしてもしそれらを好きになり、気分を駆り立てられるならば、ほかの人と分かち合いたくなる。またそれらが失われようとしているならば、保存するためにあらゆることをしなければならない。それがアーカイヴ作業の役割です。もし自分がなにかを好きになれば、私はそれを分かち合いたいわけです。自分ひとりだけで見ても、幸せにはなれません。(…)そしてほかの人との分かち合いには、それがなんであれ、自分の愛するものを管理し保存することが関わってくるのです。

ジョナス・メカス¹

ジョナス・メカス、もう一つの横顔

壁の貼紙に目を留めない限り、この威圧感ある煉瓦造りの建物の中で、世界の実験映画が保存され、入れ代わり立ち代わり上映されているとは誰も気づかないことだろう。さる9月15日、ニューヨーク、マンハッタン島南部にあるアンソロジー・フィルム・アーカイヴスを訪れた。

1970年12月に映画作家ジョナス・メカスが創立し、現在も彼が所長を勤めるこの映画アーカイヴは、前衛映画や個人映画、世界のインディペンデント映画を中心に収集と保存、上映を行っている世界でも貴重な組織である。同じニューヨークで、近代美術館(MoMA)の映画・メディア部という世界的な大手アーカイヴが映画史のメインストリームを志向してきたのに対し、アンソロジーは“もう一つの”映画芸術を顕揚し、いわばMoMAとの間で互いを補完する活動を展開してきたと言える。

国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)の準会員であり、映像アーキヴィスト協会(AMIA)の会員でもあるアンソロジーだが、その資金的な基盤は満足と言えるものではない。現在、米国芸術基金(NEA)、ニューヨーク州、ニューヨーク市や複数の映画企業の支援を受けてはいるが、メカス自身、長年国内外のあらゆるところで支援を呼びかけ続けてきた。自前の収入増加にも苦心を重ねており、入場料収入とならぶ柱となっているのが、メンバーシップと寄付の制度である。個人・二人一組・学生のメンバーシップのほか、映画保存を直接の目的とする大口の寄付制度も作られた。

何よりも、いまや神話めともいえる一人の映画作家を活動の中枢に抱き、作家自らがその先頭に立っているという運営形態が世界のアーカイヴの中でもほとんど例を見ない(ニューヨークにいる限り、ほぼ毎日出勤しているそうである)。だが、そもそもメカスにとって映画をすることと、見せること、論じること、保存することは別々の理念に属する仕事ではない。彼がこうした理念を抱き始めたのは、1949年、リトアニアから難民としてアメリカにたどり着き、映画カメラを手にした時からである。1955年に雑誌「フィルム・カルチャー」を創刊、1962年には「フィルムメーカーズ・コーペラティヴ」を組織して個人映画の自主配給に乗り出し、さらに「フィルムメーカーズ・シネマテーク」を根城に上映活動へと仕事の幅を広げる中で、“産業”とは無縁なこの分野の映画をいかに守るかという問題に突き当たっていった。アンソロジーはその延長線の上に、彼の映画思想のなかでごく自然に着想されたアーカイヴなのである。

このいかめしい建物はかつて裁判所だったもので、窓の鉄格子など、所々に留置場らしき造りをとどめている。アンソロジーは、創立以来

2回の引っ越しを経て1979年にこの「裁判所」を入手、全面的なリニューアルの結果、1988年10月に2つの劇場、資料室、保存部門、事務室、展示室を備えた本格的な映画施設として開館を果たした。そこへ至る険しい道のりはいまや語り草となっているが、計画に賛同する著名アーティストや、世界に散らばる友人たちの援助が大きな役割を担った(日本でもイメージフォーラムなどを中心とする「映像美術館建設賛助計画」が発足した)。2005年現在、映写技士と劇場受付を除く常勤スタッフは10名で、ほかに映画研究者やインターンも積極的に受け入れている。事務室で飼われている猫や、四方の壁面にチラシやポスターを散りばめたメカスの執務室は、このアーカイヴ独自の親密さを保証しているように思われた。

前衛・個人映画のメッカとして

上映は200席の裁判所劇場と75席のマヤ・デレン劇場の2つで行われ、いずれも35mmや16mmはもちろん、8mm、スーパー8mm、各種のビデオ・フォーマットにも対応している。劇場はスタッフによるプログラミングだけでなく、ゲスト・キュレーターを迎えての企画や小規模な映画祭にも門戸を開く。とりわけ、アンソロジーならではの特筆すべき企画が「エッセンシャル・シネマ」と呼ばれるプログラムだ。アンソロジー創立後の数年間をかけて独自の「選考委員会」が選定した、世界の前衛映画史を俯瞰する約330作品のコレクションがレパートリー方式でいつでも規則的に上映されており、アンソロジーが編み出した映画芸術の「定義」を半永久的に発信し続けている。

またアンソロジーの映画保存活動は、1972年にインディペンデント作家たちの作品の保存プログラムに着手したことに遡る。スタン・ブラッケージ、ジョゼフ・コーネル、マヤ・デレン、ブルース・ベイリーといった錚々たる映画作家たちのフィルム素材を収集、ネガフィルムやマスター素材への転写を行うことで、作品を散逸から守ってきた。建物内の「低温保存庫」には貴重なオリジナル素材を取めた保存棚が並ぶが、もちろん上映と同じく、フィルムとビデオそれぞれの多様なフォーマットを一手に引き受けている。保存庫内で、すべてのフィルムを映画作家別(アルファベット順)に配置する方式は世界的に見ても類例がなく、あくまで個人作家の

仕事を顕揚するアンソロジーの思想が濃密に現れている。よって、所長であるメカスの作品は保存庫中央部の「M」の場所にあるが、この棚ではメカス本人が今も自作の整理を続けていて、他のスタッフは立ち入れないのだという。

アンソロジーの保存事業はここ数年、急速に質量ともに拡大している。2003年9月に初の専門のフィルム・アーキヴィストが着任して以来新しい活動に次々と着手、保存プロジェクトと同時に、一般のアクセスに対応できるための態勢作り、さらに地下にある保存スペースの改善にも取りかかろうとしている。2005年は、メカスがニューヨークに住み着いて以来撮りためてきた素材を約3時間にまとめた代表作『ロスト・ロスト・ロスト』(1975年完成)の復元公開にこぎつけたほか、アメリカの実験作家ポール・シャリツの映画やマルチスクリーン作品のネガフィルムを作成、ニュープリントをロンドン映画祭に提供している。現在も、マリー・メンケン、マヤ・デレン、ストーム・デ・ハーシュらの作品保存プロジェクトが進行中であり、さらに音声資料(700本のテープ)やビデオ・コレクション(4,000本以上)の保存事業も始まっている。

またアンソロジーは、前衛映画を専門とするドキュメンテーション・センターとしては世界最大と言える資料室を擁している。収蔵の対象は書籍・雑誌、スチル写真、ポスター、映画作家の講演やインタビューの録音テープ、上映カタログ類といった資料だが、そのほかに映画作家・団体別のファイルが作成され、直筆原



アンソロジー・フィルム・アーカイヴス外観



低温保存庫内のアーキヴィスト、アンドリュー・ランパート氏



ジョナス・メカスの執務室

稿や書簡、脚本、ノート、新聞記事などの一次資料が収められている。現在は、閲覧希望者からの要請に応じて開室している。

ロスト? ロスト? ロスト?

メカスはフィルム・アーカイヴを、映画を人々と“分かち合う”場所だと定義づけた。映画への愛情を言葉のまま野ざらしにしてはならず、何らかの“システム”によって裏付けさせること、それこそがフィルム・アーカイヴの本質だという考え方である。例えば、アンソロジーの近年の活動として定着してきた事業として、1992年に始まった「アンソロジー・フィルム・アーカイヴス映画保存賞」がある。映画保存に功績のあった個人や組織に与えられるこの賞は、2006年3月の授賞式で15回目を迎えたが、こうした仕事の中に、アーティストとしてのメカスとは違った一人の稀有なアーカイヴ人を発見すべきだろう。そして、メカスは昨年83歳になった。いまだ精力的に製作活動とアーカイヴ運営にエネルギーを費やしているが、長い目で見れば、メカス以降のアンソロジーがいかに永続的な態勢を築くべきかも課題となってゆくだらう。

『ロスト・ロスト・ロスト』は、祖国を失ったまま、いまだ新しい場所を獲得していない人間による苦痛の痕跡だと語る彼にとって、アンソロジーとは、映画によって打ち立てたもう一つの“土地”だとも言える。「ロスト」の語が、もともと苦痛に満ちた言葉であるのはフィルム・アーカイヴにとっても変わりはないからだ。かくして、作ること、集めること、守ること、論じること、見せること、見ることがすべて一つの行為であるような映画の“分かち合い”の場所、この世でもっとも“詩”に近いフィルム・アーカイヴを、メカスとその仲間たちは打ち立てようとした。そして、それを守る闘いは続いてゆくだろう。たとえ、古い親友のこんな助言が残されているとしても。

私はずっと、ジョナスのプロジェクトを支持している。だけど、(…)ジョナスは自分の映画製作に必要な時間を他のことに割いてはだめだよ。

アンディ・ウォーホル²

アンソロジー・フィルム・アーカイヴスのウェブサイトは以下の通り。¹

<http://www.anthologyfilmarchives/org>

(フィルムセンター主任研究員)

註

- 1 「アート・ティクトク vol.0」(2006年、近畿大学国際人文科学研究所)ジョナス・メカス インタビュー「すべての過去は私の中にあるのです」
- 2 「美術手帖」1983年10月号、「ジョナス・メカスのアンソロジー・フィルム・アーカイヴス」



東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ

<http://www.momat.go.jp/>

お問い合わせハローダイヤル

☎03-5777-8600

「NFCニューズレター」第66号

(2006年4月-5月号/隔月刊)

発行・著作:

独立行政法人 国立美術館/東京国立近代美術館©

編集:

東京国立近代美術館フィルムセンター

〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6

☎03(3561)0823

制作:

印象社

発行日:

2006年4月1日

* 無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER

Bimonthly

(Volume XII No.1 April-May 2006)

Published and Copyrighted by

The National Museum of Modern Art, Tokyo ©

(Independent Administrative Institution National Museum of Art)

Edited by

National Film Center

(The National Museum of Modern Art, Tokyo)

Add.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Tel.: 03(3561)0823

Designed and Produced by

Insho-sha

Date of Publication:

April 1, 2006

*No part of this publication may be reproduced or reprinted without the approval of the publisher.